

〈書評〉

COSIMA *La sublime* par Françoise Giroud

——コジマ・ワーグナーの偉業と情熱について——

百々雅子

本書 *COSIMA La sublime* (Paris: Edition Fayard / Plon 1996, p. 281) は、作曲家フランツ・リスト (Franz Liszt 1811-1886) の娘にして、作曲家リヒャルト・ワーグナー (Richard Wagner 1813-1883) の妻であったコジマ・ワーグナー (Cosima Wagner 1837-1930) の生涯を綴った一種の伝記小説である。フランス人ジャーナリストで文筆家でもあるフランソワーズ・ジルー (Françoise Giroud) によって1996年にフランス語で書かれたものであり、邦訳は今のところ出版されていない。

ここ10年ほどの欧米においては、フェミニズムの流れから、音楽学に新しい視点が展開されたり、女性音楽家たちが歴史の中から掘り起こされ、その業績の見直しがなされるようになった。女性音楽家の見直しという点では、彼女らの作曲した曲が演奏されたり、その生涯を綴る伝記が著されたりもしている。

コジマ自身は音楽家ではなかったが、冒頭に述べたように2人の大音楽家達のもっとも近くにおいて、とりわけワーグナーの音楽活動にたいして貢献するところ限りない人物であった。

著者ジルーは、かつて「歴史的に著名な人物の妻」としてとらえられてきた女性に焦点を当てて、彼女ら自身を主人公とした伝記をいくつか手掛けている。コジマと同様に音楽家の傍で生きた女性をとりあげた書物としては、*Alma MAHLER OU L'ART D'ÊRE AIMÉE*¹ がある。ジルーの略歴については、この著書の邦訳書である『アルマ・マラー、ウィーン式恋愛術』² の訳者あと書きに簡潔にまとめられているが、ここから一部を拾うと、次のようにきわめて多才な人物像が浮かび上がる。

ジルーは1916年に政治新聞の社主を父として生を受ける。最初はフランス映画界で頭角を現し女性第1号の助監督になり、その後、脚本家としても才能を発揮し、1947年のカンヌ映画祭では「恋愛心理映画賞」を受賞する。ジャーナリズムの世界では、1953年にフランスを代表する週刊誌の1つである *L'Express* を創刊、長年編集長を勤める。また1974年に誕生したジスカール・デスタン政権下では「女性の地位」閣外相 (民間人から登用した大臣のこと——評者注) ついで文化大臣を勤める。その著書は女性を扱ったものが多い³。

さて、コジマに関してである。コジマの2人目の夫ワーグナーについては膨大な数の研究書——日記等の関連書籍がある。一方コジマに関するものは数が少ないが、それらをあげてみると、古くは彼女の死の直後の1930年に書かれたリシャール・デュ・ムーラン・エキヤールによる『コジマ・ワーグナー』⁴ や、最近のものではジョージ・マレックによる『コジマ・ワーグナー』⁵ などがあり、また彼女自身が直接書き残したものとして『日記』⁶、『ニーチェとの書簡集』などが出版されている。

ジルーの描いたコジマの一生はどのようなものだったのか。まずは、以下に、その16章からなる本書の要旨をまとめ、そのあとで、ジルーの視点や、そこから見えるコジマ像について考えていきたい。

コジマは1837年に、当時ヨーロッパ中を席卷していたハンガリー人ヴィルトゥオーソ・ピアニストにしてパリのサロンの寵児リストと、不倫の末駆け落ちしたフランス人貴族のマリー・ド・フラビニ・ダグー (Marie de Flavigny d'Agoult)、通称ダグー伯爵夫人 (Comtesse d'Agoult) の間に、逃避行中のイタリアで私生児として生まれる。その数年後にこの2人は別れてしまう。母マリーはパリの正式な夫との間の娘のもとに戻り、兄の助けでサロンを開き、多くの文人達と親交を結び自らも作家として著作活動始める。マリーはダニエル・スターン (Daniel Stern) というペンネームで活動するが、リストへの恨みから『ネリダ』⁸ という小説を著わした。ここではアレゴリーとしてリストを忘恩で貧民の青年画家として登場させ、これが当時のベストセラーになる。これと同時期に、リストとの間に生まれた3人の子供を手元に引き取るべく親権を得ようと様々な手段を講じ、最終的にはその条件として2人の娘達に結婚持参金10万フラン (現在の換算額は示されていないが相当な金額であるのは間違いない——評者注) をつけると申し出た。だが、結果はリストから「子供達にはいかなる物質的、金銭的優越性より、自分と同じ人生観、道徳感を共有して欲しい」と、にべもなく拒絶されてしまう。一方リストはマリーとの3人の子供であるコジマ、姉のブランディーヌ (Blandine)、弟のダニエル (Daniel) をパリにいる実母に預け、自らは再びヨーロッパ中を演奏旅行に出かける。このような環境の中でのコジマの幼年期は、父が金に糸目をつけずに雇った家庭教師から十分な教育を受けたものの、父母共に不在の、親への愛に飢えたものだった。

14歳で再び父に再開したときには、父は新たな恋人、ロシア人既婚女性カロリーヌ・ド・ヴィットゲンシュタイン夫人 (la princesse Carolyn de Wittgenstein) と共にあった。この時父が連れていた、後にコジマ自身の夫となるワグナーと初めて対面する。当時、リストはワグナーを「未来の音楽 (la musique du future) を書く男」と称していた。父の恋人ヴィットゲンシュタイン夫人はコジマら3人の子供をリストの母から引き離し、自分達が居を構えるヴァイマルに呼び寄せることを望むが、リストが子供に煩わされることは望まず、姉妹をベルリンへ、ダニエルをウィーンへ寄宿させてしまう。姉妹が預けられた先は、リストの一番弟子にして師同様ワグナー信奉者である天才的ピアニスト、指揮者ハンス・フォン・ビューロー (Hans von Bulow 1830-1894) の所であった。コジマとビューローは当時彼が心酔していた『タンホイザー』『ローエングリン』のテキストを通じてお互いに接近していくが、ある日、タンホイザー序曲を指揮し、ベルリンの聴衆から大不興を買って相当な精神的痛手を受けたビューローを慰めるうちに、コジマは唐突に結婚を申し込まれて承諾してしまう。

かくして2人は1857年に結婚する (コジマ19歳、ハンス27歳) が、何と蜜月旅行先は当時チューリッヒで借金の債権者からの逃亡生活を送っていたワグナーの所であった。ワグナーは作曲中の曲の初見演奏 (déchiffage) をして演奏効果を確かめるために、どうしてもビューローの卓越したピアノの腕が必要であったし、身近にいる唯一の理解者に等しいビューローの存在はなくてはならないものであった。当時ワグナーの妻であったミンナ (Minna) といえ、夫の音楽に全く理解を示さず、一般に理解される「もっとましな曲 (la bonne musique)」を作るようにと嘆く始末であった。

以降、ビューロー夫妻はワグナーの要請で、度々チューリッヒに滞在するが、そこには居候先のヴェーゼンドク (Wesendonck) の妻マチルデ (Mathilde) に熱を上げているワグナーがいた。このマチルデは、ワグナーにとっては歌劇『トリスタンとイゾルデ』のイゾルデのモデルとなっていた理想の女性であった。このような状況下でワグナーの偉大さに次第に傾倒していくコジマであったが、それが深い愛情に変わるのに時間はかからなかった。ビューローも増々ワグナーに心酔してい

き、秘書として妻コジマを彼のもとに残し、自らはワーグナーの音楽の伝道師として指揮活動に忙しく、夫婦の関係は冷めたものになっていく。ただし妻としてのコジマは、自分が決して母マリーのように大作家にもなれず、父のように大ピアニストにもなれないことを自覚していたため、1人の女性として夫の成功に貢献することで、自らが人間として完成されることを望んでいたのである。だが結局、この気持ちは、夫ではなくワーグナーを通じて完結されていく方向をとり、コジマは彼と結ばれることになる。

二人が愛人関係になったのは1864年のこととされているが、コジマが夫のもとを去り2人の娘を連れてワーグナーの待つスイスへ向かったのは1868年である。この2人の子供は、1865年に生まれた娘のイゾルデ (Isolde) と、ビューローとの正式な離婚に至るまでに生まれたエヴァ (Eva) であるが、双方ともワーグナーの子である。ワーグナーとの間には、その後、ワーグナーの音楽の後継者になる息子ジークフリート (Siegfried) が生まれている。

ワーグナーが婚外関係に加えて子までもうけた事実は、パトロンであったバイエルン国王ルートヴィヒ2世を巻き込んでの大スキャンダルに発展した。その後正式にビューローとの離婚が成立したのは1870年で、同年ワーグナーとコジマは結婚する (ワーグナーの妻ミンナは1866年にこの世を去っていた)。この様な関係にありながらも、ワーグナーは常にビューローが自らの曲を指揮するのを望んでいたし、一方ビューローも機会あるごとに心酔する偉大な音楽家のオペラを指揮し続けて数々の曲を初演する。

その後1872年からワーグナー夫妻はバイロイトに移り住んだ。パトロンである狂信的ワグネリアン、ルードヴィヒ2世からの膨大な資金援助に支えられ、様々な困難を乗り越えて1876年、ようやく第1回バイロイト音楽祭開催にこぎつけた。バイロイトの存在はワーグナーの音楽だけのためにあり、このような恵まれた特権的境遇にある音楽家は音楽史上彼のみである。これとても妻コジマの献身なくしては実現し得なかったわけだが、この献身は、1883年にヴェニスでワーグナーが客死してしまうことでは終わらなかった。ワーグナーの死は、彼が亡きあと、一家の中心的存在としてのコジマの奮闘の始まりに過ぎなかった。それは何をおいても、亡き夫の意志を継いでバイロイト音楽祭を存続させることであり、また息子ジークフリートを第二のワーグナーとして育て上げ、バイロイトに君臨させるという夢を実現させるための、47年もの長い道のりであった。1886年から1906年の20年間にコジマが上演させたオペラの回数は何と252回にも及び、10人もの専属指揮者を監督指導した。こうして1930年に息を引き取るわけであるが、同年その後を追うかのごとく息子ジークフリートもこの世を去る。

以上がジルーに描かれたコジマの一生である。コジマの辿った人生を考えると、ロマン派の大音楽家であり現代音楽への橋渡しをしたリストを父とし、その音楽の是非を巡りドイツ音楽界を二分する大論争を引き起こすこととなるワーグナーを夫としたこと、またその夫の死後47年もの長きにわたり息子ジークフリートと共に、ドイツ音楽の殿堂ともいえる『バイロイト音楽祭』(第1回1876年) および『バイロイト祝祭劇場 (Festspielhaus)』を、ワグネリアンの聖地とすべく奮闘し、取り仕切っていた、という事実だけでも彼女の人生の音楽史的重要性は計り知れない。そして彼女の生まれた家庭や自らが育んだ2つの家庭、またそこにあった人間関係を知る時、その93年の人生を生きた1人の女性としても非常に興味をそそられる。

このような目で見ると、本書は数少ないコジマに関する書物の1つとして重要なものといえるが、その一方で、ある種の物足りなさも強く感じざるを得ない。そもそも歴史上の人物を考えようとする時、

その人物を彼女の生きた時代から切り離して考えることなどできない。コジマがどのように生きたかは、その生涯がどれほど個性的なものであろうと必ず時代という環境の影響を受けているはずだからである。このような歴史的、社会的視点を、小説仕立ての伝記という形態をとった本書に要求すること自体が無理なことかもしれないが、本書を読み進むうちに、例えば、コジマの、ある時の考えや行動がその当時は一般的であったのか、そうでないのかを知りたくなるのは評者のみではないだろう。

評者がこういう時に、思わず想起する他の作品に、例えば同じく音楽に関係した女性の生涯を扱った伝記、フランソワーズ・ティヤール (Françoise Tillard) による『ファニー・メンデルスゾーン』⁹ がある。これなどは19世紀を生きた音楽家メンデルスゾーンの姉ファニーの生涯を、一家に保存されている膨大な日記、書簡等をその資料とし、適宜に引用されるその一部にも徹底した注釈をほどこすことにより、「伝記」という枠を超えた、むしろ歴史社会学的論文とさえいえる説得力を備えたものである。そこにはティヤールの一貫した明晰な論理がうかがわれる。

これに比して本書の著者ジルーは、先に挙げた『アルマ・マーラー』のなかのアルマの生涯と同様、コジマの生涯を希代な女性の愛の物語として描いているといってもよいだろう。多少大胆なたとえ方をすると、小説『風と共に去りぬ』の中のヒロイン、スカーレット・オハラの人生的ように。

先にも紹介したように、ジルーは映画の助監督兼脚本家として、カンヌ映画祭で「恋愛心理賞」を獲得したような、恋愛を描くことにかけては、もっともその才能に恵まれた人物である。その才能が、本書においても遺憾なく発揮されているようである。コジマを叙述する次のような文の中に、男女の愛が（コジマという）女性の立場から至上性、運命性をもって描かれている。「愛する男（ワーグナー）と強い情熱を分かち合った（コジマのような）ヒロインは恋愛史のなかでも稀な存在である」¹⁰。あるいは、「天才（ワーグナー）を愛することは、コジマの運命であった……情熱によって彼女はすべてを天才に捧げた」¹¹というように。

ジルーにとって、コジマの生涯は、その「情熱 (passion)」によって動かされていくものにとらえられている。まさに恋愛史上主義である。この情熱は、具体的には、たとえばコジマを次のような人生の行路へと向かわせたという。

すなわち、婚外子として生まれて父母ともめったに会う機会もなく、祖母も含めた幾人もの人のもとで幼少期を過ごすという、愛情という面では決して恵まれたとは言えない成長期を経験したコジマが、その婚外関係で社会的に非難的となりながらも、ついにワーグナーとの結婚生活を始め、新しい家庭を正式に始めるや、前夫との間の子供2人を引き取り、ワーグナーとの間にも子供3人をもうけて一気に大所帯をつくる。引き受けたのは子供だけではなく、もちろんワーグナーの仕事のパートナー役もある。バイロイトのため作曲活動に専念するワーグナーを支えて、その他必要なすべての仕事、たとえば資金調達も人材の確保も実質的には彼女が取り仕切った。

人生のすべてが、人を恋する「情熱」によって導かれる、とジルーがあまりに強調するので、一読者としては、確かにフランス人女性が描いた女性の伝記小説であれば「情熱」の文字なくしては語り進められないのかもしれない、という紋切り型の考えすら浮かんでくるほどである。これが真実でなくとも、本書が発刊された2年後の1998年にはいわゆるペーパーバックになる¹² ほどに売れた背景には、「情熱」という語に象徴される、その恋愛小説的な手法に主な理由があることは否めないだろう。

しかし、ジルーは、本書をいわゆる一般受けする恋愛小説仕立ての伝記にしたからといって、事実を歪めて述べているのでは決してない。むしろ本書は、コジマと周辺にあった人間関係を、そこで生起し

た出来事の中でクロノジカルに、しかも簡潔にまとめていて、本来ならコジマを取り巻くきわめて複雑な人間関係や、時の推移もわかりやすく構成している。ゆえに、1本の恋愛小説を楽しむという目的に限らず、音楽史的関心や、もちろんフェミニズム的関心からも読む価値の充分にある書物である。

最後に、本書をもとに、改めてコジマという女性とその偉業について考えてみよう。

彼女の周りには、リスト、ビューロー、ルードヴィッヒ2世、ワーグナー、マリー・ダグー、上の要約文では、これも言及する余裕がなかったが、ニーチェ、さらにはヒットラーも現れている。これらのきわめて著名な歴史的人物との多様な関わりのなかでコジマは華やかに生きたということが、まず、彼女の人生という舞台の背景として整理できる。

次に、彼女の業績である。

たしかに、バイロイト音楽祭を夫と共に創設し維持して、音楽の歴史に新たな1ページを加えた偉業は、1人の人間が一生で成し遂げるものとしては間違いなく目を見張るものである。しかし、一般に偉業を成し遂げた男性を評するときに、しばしば付随的に出てくる「家庭人」としての人物像評価という項目をここでも彼女に当てはめてみると、意外にも平凡で、私達が周囲に見なれた人物像が浮かび上がる。愛情を求めての結婚、不貞 (adultère)、離婚、再婚をした彼女が、妻として夫を助け、他の4人の娘とは全く違った特別な愛情を1人息子に注いだ。それは「溺愛 (idolârie)」と呼べるものであったと述べられている。夫の死後は、その仕事すべてを引き継ぎ、その間に息子を後継者として育ててこれを手渡そうとする。ここにはあくまでも、いわば「ワーグナー家」という家族を、公的な領域で仕事をする男性を中心に支えようとする、妻であり母である存在が見えてくる。そうすると彼女にとっては、その偉業と家庭人としての活動は別物ではなく、むしろ妻であり母であろうとしたことが、結果として偉業を創出したのだといえるのかもしれない。自らが理想とする「愛情溢れる家庭人」を貫こうとするエネルギーが、極めて恵まれた特殊な環境、つまり、これ以上は望めないほどの音楽的環境、社会的地位、を与えられて社会に向かいバイロイトに結実したと。

このようにまとめたコジマのあり方を称して、「それでも、ワーグナーがいなければ彼女の業績はなかった」というのは簡単なことである。しかし、本書を通読してみると、コジマがいなければバイロイトがあったかどうかは、大いに疑われてくるのである。その意味で本書は、まさにその題名のごとく *COSIMA La sublime* (素晴らしき女性、コジマ) という内容がふんだんに盛り込まれていて、読者のコジマへの関心を強く引く。本書が、コジマに関する研究の動機付けや、更なる研究へとつながることを願いたい。

(国立国際医療センター附属看護学校非常勤講師)

注

1. Françoise Giroud, *Alma MAHLER OU L'ART D'ÊTRÉ AIMÉE* (Paris: Éition Robert Laffont, 1988).
2. フランソワーズ・ジルー『アルマ・マーラー、ウィーン式恋愛術』山口晶子訳 (河出書房新社、1989)。
3. 著者の他の著作については本書裏表紙に列挙されている。
4. Richard Graf du Moulán-Eckart, *Cosima Wagner* (Paris: Stock, 1930).
5. George Marek, *Cosima Wagner* (New York: Harper and Row, 1981).
6. Cosima Wagner, *Journal* (Paris: Gallimard, 1979).
7. Cosima Wagner/Friedrich Nietzsche, *Lettres* (Paris: le cherche midi éditeur, 1995).

8. Daniel Stern, *Nélida* (apparu dans La Revue Indépendante, 1846). Nelida とはヒロインの名前であるが、これは著者 Daniel のアナグラムであり、リストとおぼしき人物は Guermann という名の画家として描かれている。また Daniel Stern というペンネームについては、息子の名 Daniel とドイツ語の stern (英語の star) を組み合わせたもの、と別書にある。Alan Walker, *Franz Liszt* (London: Faber and Faber, 1983) p. 387.
9. Françoise Tillard, *FANNY MENDELSSOHN* (Paris: Édition Pierre Belfond, 1992).
10. 本書 *COSIMA La sublime*, p. 10.
11. 同上 p. 279.
12. 本書と同出版社より刊行。

*本文と注にあげた書名の文字の表記 (大文字、小文字) については、それぞれが出版されたときの表記に従った。